

浮世絵で学ぶ お江戸子育て

1986年から子ども文化の研究のために、子どもに関連する浮世絵や歴史史料の収集と研究を続けている公文教育研究会。広報の内山岳志さんに、浮世絵から読み取れる江戸の子育て事情を教えてください。

母子絵

共に眺め、共に思う
親子の絆を育む「共視」

美人画に役者絵、風景画にもちや絵など、一口に浮世絵といっても、描かれるテーマは多種多様。そんな数ある浮世絵の中に、母親と子どもの交歓風景をモチーフとした「母子絵」と呼ばれる浮世絵があります。そんな中から今回は、秋にちなんだ作品をご紹介します。

この作品は明治時代に活躍した絵師、山本昇雲が描いた「いますぐたつるし柿」です。「つるし柿」とは、干し柿のこと。皮をむいた渋柿のヘタをひもで結び、軒先に吊り下げる光景は、昔も今も日本の秋の風物詩です。

柄やお母さんの襟にあしらわれた銀杏など、着物にも秋の雰囲気満載。子どもの重ね袖の美しさからは、親の細やかな気遣いや愛情の深さを感じられます。

一方、子どもといっしょにつるし柿に目を向けているお母さんもとてもしずかぬ表情。見ているこちらでも微笑んでしまいます。

精神科医である北山修氏は数多くの浮世絵を分析するなかで、「同じ対象を共に眺めているように見える母子像が頻りに登場すること」に気づき、その姿を「共視」と名づけました。日本の母子関係は情緒的関係が濃厚で、対象を介した言語交流が豊かだと言われています。そんな親子の絆は、この浮世絵に描かれた二人のように、互いの体に触れながら、同じ対象を共に眺め、共に思い、共に語ることで形成されていくのです。

秋は絶好のお出かけシーズン。お子さまと手をつないで、お話をしながらお散歩をする楽しい時間は、きっと親子の絆を強く、深くしてくれることでしょう。

いますぐたつるし柿

山本昇雲 明治39(1906)年

この作品は歌麿以来の美人大首絵の流れをくんだ「今すがた」を冠した50を超える揃物の一枚。描き表装からはみ出した着物の袖が、つるし柿に手を伸ばす幼い子どもの躍動感を見事に表現している。山本昇雲は明治の女性や子どもの風俗を巧みに描いた絵師。

日本の
伝統的な子育て事情を
お伝えすることで
現代の子育てを応援します

KUMON
×
Happy-Note

editor memo

くもんの 「つるし柿」

本連載でご紹介している浮世絵を所蔵するのが公文教育研究会。その創始者である公文公くもんこうさんは生前、公文式指導者や社員に対して「つるし柿になるな」という言葉で、絶え間ない研鑽の必要性を説いていたそうです。その心は「ヘタなりに固まるな」。つるし柿が「ヘタ」にぶら下がるように固まることと、生徒指導の「下手」さかけた公文公さん流のユーモアあふれる表現だったようです。

ここで紹介した作品はウェブサイト「くもん子ども浮世絵ミュージアム」でもご覧いただけます。
<https://www.kumon-ukiyo.jp> 【文・写真提供●公文教育研究会】